

薩摩

琵琶歌

廣瀬中佐



自序

凡そ、薩摩琵琶歌を奏せんとするに、まづその歌曲の性質、精神のある所を究め、然してその歌詞に従ひて、悲哀なり、個所は悲哀、壯快なり、個所は壯快に曲節に抑揚を附し、聴者をして恰もその境にあはしかく感ぜしめざるべからず。これ琵琶奏曲、第一の要義なり。故に吟せんとせば、まづ精神の沈静を計り、熱心に毫も怠らざる所なり。如上の精神を以て曲節に對し、折調節を生かして奏すべし。節を奏し、人はあまされど精神を奏し、人は勁なり。これ節にのみ拘泥し、精神を没却したればなり。大方諸子、幸に一帖を座右に備へて、この注意を忘るるに、業習の餘暇一曲を奏して、浩然乃氣を養ひしべし。

註節注意

音の大小高低等、それごとく長短の符號を以て示さず、大干とあるは最高音を指すものなり。假し、落者の大干とすと定むれば、其の他の音聲を以て、幾分をとり、如何とせれば、落者か、自身の最高音を悉く奏せ、身二に氣をすべき音聲に困難を来すのみならず、第一に聲に餘裕なく、聴者に於ても、剛若しきものなり。中干とは、初め地音に出で、中六七の干音上げ、亦地に落すものなり。地音とは、三若くは五位の音にして、歌の曲節により異る者なり。明れとあるは、勇壯活発の音を以てすべし。吟替りは、概して悲哀なる場合ければ、その心地を以て、吟替等を用ふるを可とす。股落、吟ち淫切りは、符號の示す通りに聲を引き廻し、吟を地に落す。

明治四十二年文月下浣

編者識

廣瀬中佐

幸及の生々か、つら夷をが拂は、



我れ、最後の歌を山塚原

穿く忠義の鬼となす、相落神

果の今茲に、段又よあれ、ます軍神、

いそぬ時、たまに、さあ、

春の雪降る宣哉の大詔征露の事  
鼓りたる武まのり傳くたる梓る射  
かほまのそを都り霞とほく大支  
夫の多まごつ中た朝も子に廣瀬中  
佐のち死は傳くまくだた涙ありはは月  
せむる中「落白閑鏡の任勢城帯び」  
コウ コラヘイ サ ニシム

福井丸にまきりて向ははつ忠族順口あり  
雷矢叫の玉のあらんと降る中城おをすお  
とせむ決死隊  
イザツケマ ナサヒ

玉の清れ絶ゆるに数島あり

大如おのちのくまふく

と痛ふたる歌はよのあたり捨る此身の屍  
コトカハネ

錦と笑悟して志たる塔見  
月干「我と我の如き沈め」任勢はぬくぬき  
まらばボートあつたの命全に吾士ひ  
くやんくの中在り乗んたりが身  
はばくおきなり兵士の玉の緒を固乃  
實とかぬてより都下をいたる仁愛の情  
タカラ ニシナイ ナサケ

の聲をいり「今」替「杉野」兵曹長はあ  
らぶか 呼ぶと答はなうけり 杉野 兵曹  
長はあつたお再び呼ぶと答へ  
野 兵曹長はあつたお呼ぶ事一度  
にるぶとも答へるものは着浪の早もテッキ  
なかくすまで「船はぬきに沈み行く是道  
フ子 シタイ シズ ユ コレミテ

なりと飛ぶる刹那に敵弾を承る

甲佐の頭上に破れつて、嗚呼彦濂

武夫六尺の體僅か一片の肉塊を致し

落花みづらんとたふらにけり落花みづらんとたふらにけり

一世義烈赤穂里 三代忠義楠子門

憂憤投身薩摩灘 慷慨就刑小塚原

君が作りし唐歌の正氣の歌は一節は

吉人に恥ぢぬ真心を其儘茲に軍神

花は櫻木武士の後世鏡となる神

の音をとらるるに妙なる音也

に妙なるらん

に妙なるらん

257  
530

明治四十一年七月廿三日印刷  
明治四十一年八月一日發行

出版目錄

國の御柱 城山

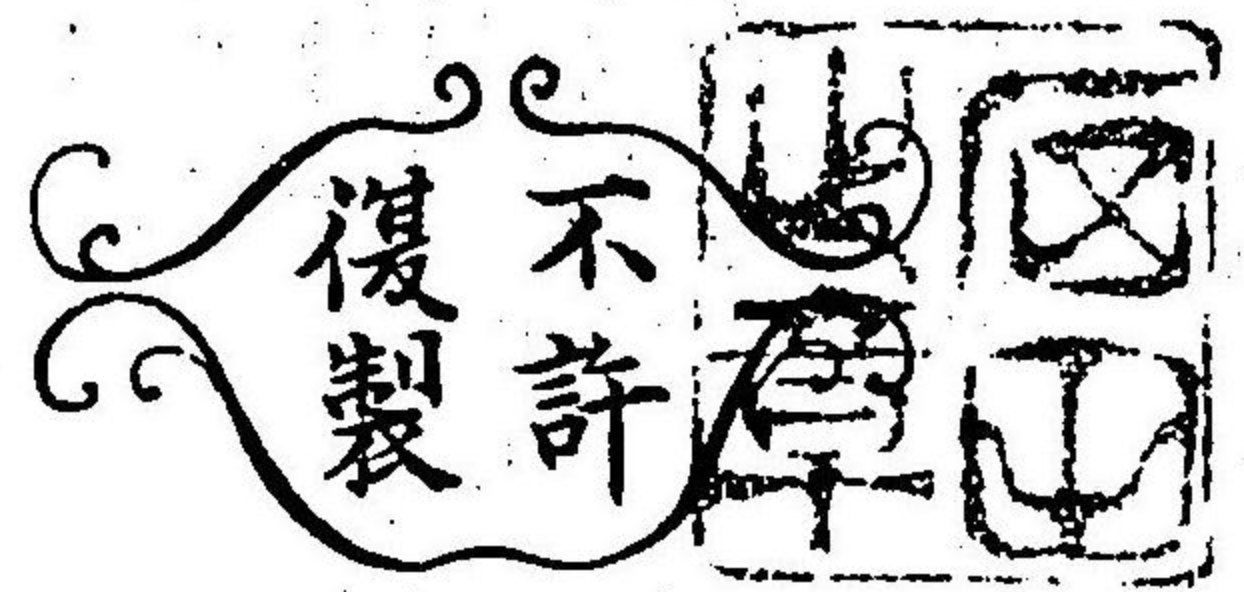
附送別 附達未山  
錦の御旗 廣瀬中佐

威海衛 小督

臺灣入 川中嶋

吹雪の敵 吉野落段

丸石童丸



正價壹部金七錢

曲譜 西田金起

發行者 西村寅次郎

發行者 鈴木武二郎

印刷者 須佐權平

印刷所 東陽堂

發行所 東雲堂

發行所 文友堂

東京市日本橋區馬喰町四丁目廿番地

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

東京市神田區駿河臺袋町十一番地

東京市日本橋區馬喰町四丁目廿番地

東京市神田區駿河臺袋町十一番地

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地

